

61

前壁中隔梗塞のECG上の逆転T波と²⁰¹Tl SPECTに於ける“重症度”の検討

渡辺元博 後藤紘司 長島賢司 宇野嘉弘

安田憲生 大野康 野田俊之 藤原久義 (岐大2内)

心電図上の異常Q波の存在が必ずしも貫壁性梗塞を表すものでないことはよく知られている。また心電図上異常Q波が存在しても逆転T波の存在しない例では剖検にて心内膜下梗塞であったという報告もある(JACC,1997)。

今回我々は明確な心筋梗塞の病歴があり2ヶ月以上経過した異常Q波を有する前壁中隔梗塞でかつ他の部位には梗塞所見のない症例(n=15)を対象に以下の検討を行った。対象を逆転T波の存在する例と存在しない例に分け安静時²⁰¹Tl SPECT (または運動負荷時遅延像)の perfusion abnormalityの程度を比較した。その結果異常Q波の誘導数は同じでも逆転T波の存在する例は存在しない例に比し有意にdefectが大であった。

62

急性心筋梗塞の再灌流成功例において安静時Tl心筋シンチは心筋viabilityを過小評価する一

GIK-Tl心筋シンチとの比較から一

外山卓二, 星崎 洋, 直田匡彦, 中津川昌利, 磯部直樹, 大島 茂, 谷口興一(群馬県立循環器病センター)

急性心筋梗塞の再灌流成功例において心筋viability評価を安静時Tl(R-Tl)とGIK(glucose-insuline-kalium)-Tl心筋シンチと比較検討した。対象は再灌流に成功した急性心筋梗塞10例である。全例に急性期に安静時^{99m}Tc-PYP, Tlのdual SPECTおよびGIK-Tl心筋SPECTを施行した。^{99m}Tc-PYP集積領域を梗塞領域とし、梗塞内でのR-TlおよびGIK-Tlの集積程度おとび全欠損スコア(TDS)を比較した。集積程度は8例(80%)でGIK-Tlが良好であった。TDSはR-Tl vs GIK-Tlが 19 ± 9 vs 10 ± 3 ; $p < 0.05$ であった。急性心筋梗塞の再灌流成功例において安静時Tl心筋シンチは心筋viabilityを過小評価する。

63

急性心筋梗塞における心筋 BMIPP イメージングによる予後評価(第一報)ー多施設共同研究ー

中田智明, 笹尾寿貴, 藤原嗣允, 浜辺晃, 平沢邦彦, 田中秀一, 加藤淳一, 松木高雪, 勝賀瀬貴, 玉木長良, 小林毅, 古館正徳, (北海道心筋代謝画像検討会)

急性心筋梗塞における予後評価上の心筋 BMIPP 集積の意義を、11施設 100例を対象に検討。発症1ヶ月以内のTl-BMIPP SPECT上の異常を半定量評価(TDS)、心機能、冠動脈病変、治療内容等の臨床指標とともに、心事故に関し平均26ヶ月追跡し解析。心事故発生は29例(29%)、心事故群では、BMIPP TDS、そのTDS ≥ 15 の頻度が有意に大なるも、Tl TDS、乖離スコアに有意差なし。また、心事故群で有意に、女性、LAD病変、狭心症症状なし、を多く認めたが、重回帰分析ではBMIPP TDS ≥ 15 が唯一の説明因子として選択。以上、急性心筋梗塞患者の予後評価におけるBMIPP集積の有用性が示唆された。

64

虚血心筋検出における安静時心筋 BMIPP SPECTの有用性と限界

市川和弘、藤原嗣允(北海道循環器病院)、中田智明、小林史、笹尾寿貴、島本和明(札幌大二内)

虚血心筋における脂肪酸代謝障害の検出とその臨床的有用性を検討すべく、狭心症(AP)18例、心筋梗塞(MI)18例、対照8例の計44例において、運動負荷Tl-SPECT、BMIPP-SPECTを施行。BMIPP集積、Tl集積とその再分布の有無をブルズアイマップにより定性的に、また左室18領域において半定量的に評価。Tl再分布を基準とした血流・脂肪酸代謝乖離の虚血心筋検出の sensitivity、specificity、positive & negative predictive value はそれぞれ、AP群 57%、80%、89%、40%、MI群 92%、57%、79%、80%、全体では 73%、80%、83%、70%であった。虚血心筋の脂肪酸代謝乖離は73%で出現し、その虚血診断精度も良好である。しかし、AP群では偽陰性に注意を要する。

65

下壁梗塞における123I-BMIPP心筋SPECT所見と梗塞責任血管との関係

千葉 博、松本 久、松田圭市、山下雅司、玉城博行、田端志郎、大野穰一(耳原総合病院内科) 西村恒彦(阪大トレーサ)

以前我々は右室梗塞のタリウム心筋シンチグラム所見では後壁中隔の欠損が特徴的であると報告した。今回123I-BMIPP心筋SPECTと201-Tl心筋SPECTを急性下壁梗塞に施行し、その欠損範囲と梗塞責任冠動脈の関係につき検討した。対象は急性下壁梗塞17例(男11、女6、平均年齢68歳)。201Tl心筋SPECTでは後壁中隔にまで欠損の及んでいる例はなかったが、123I-BMIPPでは5例に後壁中隔の欠損を認め、そのうち4例は#1が責任血管であった。123I-BMIPP心筋SPECTは急性期のArea at riskの評価に有用で、梗塞責任血管の推定にも有用である。

66

冠動脈慢性閉塞枝領域における¹²³I-BMIPP像と左室壁運動の検討

上遠野栄一、大和田憲司、渡部研一、武田寛人、鉄地川原正顕(太田西ノ内 循) 丸山幸夫(福島医大一内)

慢性完全閉塞枝領域における¹²³I-BMIPP(BM)集積の意義を²⁰¹Tl像と左室壁運動との比較から検討した。対象は慢性完全閉塞枝を有する20例で、うち14例では陳旧性心筋梗塞の病歴はなかった。閉塞枝領域のBMとTlの同一断面像の集積を欠損、高度低下、軽度低下、正常の4段階で評価した。BM欠損領域はTl欠損40%、高度低下60%でいずれも左室壁運動はakinesisであり、冠血行再建後も改善はなかった。しかしBM高度低下領域はTl高度低下38%、軽度低下62%で壁運動はakinesis25%、severe hypokinesis 25%、hypokinesis 50%と多様であり、とくにTl軽度低下領域は冠血行再建後の壁運動改善が良好であった。冠血行再建を考える上でBM像は有用である。